

長年の国際保健医療経験を日本の地域医療に還元

地域保健の中核となる看護専門家の育成



■同研修 第5期生(2018年度)研修修了式(2019年1月)

数多くの国際保健医療現場を経験し、現在、笹川記念保健協力財団会長を務める喜多悦子氏は、長年の国際活動への貢献により、内閣総理大臣表彰、エイボン女性大賞、JICA理事長表彰など数多くの表彰、受賞歴をもつ。

喜多氏は兵庫県宝塚市出身。幼児期に終戦を迎え、変動の時代を過ごした。当時から海外への関心があったが、高校時代、東南アジアで活躍した米海軍軍医トム・ドゥーリーの経験談を読んだことがきっかけで医学部を志し「同じような活動をしたい」と夢を抱いた。

1965年に奈良県立医科大学卒業後、母校や国立大阪病院(現国立病院機構大阪医療センター)で小児科医として勤務した喜多氏は、1986年に誘いを受けるかたちで高校時代の夢を叶えるべく、中国の中日友好病院に赴任し、国際活動に転身した。1988年、日本人初の紛争地支援としてパキスタンに派遣され、アフガニスタン難民への保健活動にあたった。

途上国、特に紛争地支援中、喜多氏は、個々の人を対象としたこれまでの医療に加え、紛争地では、集団を診る「公衆衛生(Pブリックヘルス)」の活動が必要だと強く感じた。公衆衛生と共に国際保健の現場経験の重要性を実感したことから、喜多氏は帰国後、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学公衆衛生大学院特別研修生となった。ここで、世界のプライマリ・ヘルスケア(以下PHC)の父と呼ばれるカール・テラー博士に師事、同博士が逝去する2010年まで、最晩年の弟子として「住民の自主性、住民の自己決定、住民中心、住民による地域保健サービスの理念と実践方法を習得した。その後、世界保健機関(WHO)や日本赤十字社にも勤務するなかで、過酷な環境での保健医療活動には、地域の協力が不可欠な」と、同時に、「地域社会の啓発」の大切さを痛感した。その根幹であるPHCは、基本的人権として、すべての人々にとって健康

教育者部門 受賞者 喜多 悦子



喜多 悦子
Etsuko Kita

公益財団法人
笹川記念保健協力財団 会長
Chair, Sasakawa Memorial
Health Foundation

1965年奈良県立医科大学卒業。医学博士。小児科医としてスタートし、大学病院、国立病院にて勤務。その後、中国中日友好病院(JICA専門家)に誘われたのをきっかけに、国立国際医療研究センター、UNICEFアフガン事務所保健栄養部長、WHO緊急人道援助部緊急支援課長など、国際保健医療分野の経験を重ねる。1988年のUNICEFは、日本人医師として初の紛争地域派遣であった。1997年厚生大臣賞、2012年内閣総理大臣表彰、2013年外務大臣表彰を受賞。2006年版「NewsWeek世界が尊敬する日本人100人」に選出された。2013年より笹川記念保健協力財団 理事長、会長として、国内外の保健プロジェクトに従事。

推薦者

坂本 すが
東京医療保健大学 副学長



■インドネシア 西イリアンジャヤのハンセン病施設視察時 村の歓迎式典の踊り手たちと(2014年1月)

は等しく保障されるべきものとしての実践であった。現在では、世界的に認知され、実践されつつあるが、当時はそれほど浸透しておらず、喜多氏は、理念の普及と普遍化と人材育成のために途上国を奔走した。

その後、喜多氏はPHCをより多くの国や地域に浸透させるには、「生活支援を含めたケアも主務とする看護師が、国際保健の担い手になるべき」との考えのもと、日本赤十字九州国際看護大学に奉職し、先進国型のPHCとして「看護師中心のユニバーサルヘルズ・カバレッジを目指す」との理念を提唱。同大学で全国の看護大学に先駆けて在宅看護学を独立させたことを皮切りに、在宅訪問看護を全国に広げることに腐心した。

2014年以来、24時間365日継続して対応できる「在宅訪問看護センター」を起業運営する看護師の育成を目的とする実践研修を開始。長年の国際経験と広く深い学識に基づく真摯な指導により、研修を修了した看護師のほとんどが地域保健の中核となりつつある。小児科医から国際保健医療、看護師育成と歩みを続けてきた喜多氏は今なお、住民中心のPHCが実践される社会を目指すべく、人々の意識改革を推し進めている。